

ラボカフェ#16 居場所をかんがえる 高校生×図書館(対話記録)

7月24日(日)13:30~15:30

於 信州学び創造ラボ

リアルでは6人の高校生と学生の方1人、オンラインでは5人の社会人の方々に参加いただきました。オブザーバーとして県立長野図書館長森と企画係司書Hもひざを突き合わせ、初めて顔を合わせる人同士が多かったにもかかわらず、テーマに対する考えを思い思い、でも対する人に伝わるように熱心に言葉にさせていただきました。

ラボカフェならではの、何を言ってもよく、話がまとまることを目標にしない場が、参加者のみなさんそれぞれの経験にそくした話を広げ、会場は公共図書館でしたが、高校生が普段接する場としての学校図書館も含めた大きな図書館という概念についてまで話が及びました。

お一人の発言が次のお一人の言葉を誘発した場の空気を実況報告でお伝えしたく、個人情報には配慮しつつ、できるだけ皆さんの言葉をそのまま報告させていただきます。

館長:メインテーマを居場所と設定した。みなさんの居場所について一人ずつ聞いてみたい。ただこの設問は漠然としているので、どんな場所でもいいので、だれかと一緒(友達と話するとき)と一人でいるときによい場所を教えてください。

まず私から。高校生の時勉強するときに、一人で集中することが多いが「そばにいてほしいけれど、話しかけないで」と母親に言った。一人でこもっていると寂しく、誰かがそばにいる気配がある場所が居場所だったと思い出す。

高校生 IK さん:人のいる気配があると、集中できなくなるので集中したいときは一人で、誰かと話すときはほかにも話す人が大勢いる場所がいい。

高校生 KO さん:勉強するときは人がいてもいなくてもよい。家の環境がいつも誰かしらいる感じだから。人と話したいと思うときは学校など知り合いがいる場。

高校生 MA さん:家で勉強するときは1人がいい。学校で勉強するときは人がいるほうがいい。友達と話すときは教室の端などで少人数で話すのがしやすい。

高校生 OK さん:勉強をするときはリビングですることが多い。環境音、生活音や人の話し声が入っているほうが集中できるように思う。人と話すときはほかの人の話している中のほうが落ち着く。

学生 NA さん:勉強の時は1人がいい。人の中で集中しようとするときに限って話しかけられたりするので、一人の時間が勉強しやすい。音は必要かという、気分による。環境音があって気を取られてしまうときもあるしケースバイケース。

人と話すときは、コミュニケーションスペースのような外の場所で遠慮しないで堂々と話ができるというのが話しやすい。

高校生 HO さん:勉強するときは、周りががやがやしたりする環境で、周りも同じことをしているような場で勉強するほうがしやすい。人と話すときは話が下手で間があくことが怖いので、ほかの人がしゃべっていてあまり自分の言葉が目立たない場所がいい。

高校生 IS さん:一人っていると全く集中できないので、みんながやっていると思うと勉強できる。話すときに関しては、話すのが好きでずっとしゃべってしまうので、皆の迷惑になっても話し続けてしまう。話す場所に関してはあまり気にしたことはない。

社会人 TE さん:周りがしんとしすぎるといやいな感じがする。ざわめきがある場所がいい。どうしても集中したいときは、個室がいい。BGM がかすかに流れている感じがよい。

館長:信州学び創造ラボはいつも BGM がかかっている。元館長 HI さんが参加されているので、なぜ BGM をかけることにしたか伺いたい。

元館長 HI さん:日本の図書館では静かにと言われ続けてきた。でも今の図書館では一人で何かをする場所ではなく、人となにかをする場所になってきている。そのように話しても活動してもよいという図書館にしようと思ったが、静かにという文化が根強かった。その雰囲気を壊すために BGM を流すことにした。

この空間をつくったきっかけは、高校生でいえば家、学校の時間しかない。大人も家族のことか、仕事のことしかない。サードプレイスを提供したいと思った。新しい人と出会う場所、公共の場ともいえるのではないかとすることで作った。いろいろなスペースがある。一人で窓に向かう場所もあるし、ファミレスのようなブースもあり、人の集まる場もあり、いろんな居方ができるようにしてある。それをもとにプライベートな居場所とパブリックな居場所両方を考えてほしい。

社会人 SH さん:一人で勉強したいときは、すこし人がいるなという感じはありつつ静かなところがいい。友達といるときは、このラボのようにお茶を飲みながら過ごせる場所がいいと思っている。ほかの人たちが和気あいあいとしているのが見れば自分たちもリラックスできる。

社会人 YO さん:勉強は一人で静かなところでやりたい派。人と話したいときは、高校時代は班室があった。部活動や班活動の仲間と本や漫画や CD を持ち寄っては、これがいいとかおしゃべりをす

ることが楽しかった。高校時代の仲間とたまる場としての理想形として班室の思い出がある。
今高校で司書をしているので、そのような楽しい場の傍らに図書館の本があるという環境がいいなあとも思うが、勉強を目的に利用している学生もいるので、両方のニーズを満たせるようにもしたい。
まだその状況に至っていない。

館長：居場所が図書館という空間であるとか、そこに資料があるとかそんなイメージもできましたね。

社会人 WA さん：自分もやはりケースバイケース。無音というのは非日常な状況なので、やはりある程度音があったほうが落ち着く。人と話しているときは話しかけやすさでは、周りが話していたほうがいい。

司書 HO：やっていること、人といるかいないかによって居心地の良い場所が変わる、使い分けしているという視点に着目できた。

この後は自由に手を挙げて居場所についてこんなことを考えているなど語っていただけないか。

高校生 IK さん：活字離れという現象について調査している。若者の活字離れが問題になっているが、本を読むことの大切さとか、本を読むことがその人の居場所になるとかそんなことを考える中で本当に活字離れが進んでいるのか疑問に思っている。このことについて意見を聞きたい。

館長：YO さんもみんなの居場所に本があったらいいなど言っていましたが、本を読むことが居場所になるというキーワードも出てきた。その観点からそもそも本でなにかということが出てくると思う。漫画は本なのか、読書はどこまで含むのか、活字というと対象が絞られてしまうのか。

また一人で読むときの自分であったり、読んだことをみんなで話す行為など自由に話してもらえるとおもいます。

学生 NA さん：活字離れは起こっていると思う。斎藤孝さんの著書を読んだときに、昔は満員電車で新聞を四つ折り五つ折にしてなんとか読もうとする状況があった。今は電車の中をみまわしても新聞を読んでいる人はほぼいない。皆スマホでいろいろやっている。僕はいま安茂里の長野翔和学園というところに行ったりもしているが、そこでもみな動画をみたり、ゲームをしたりしている人たちがばかりなので、身の回りでは顕著に活字離れがおこっている。

館長：活字というと新聞というイメージがあるのかな。私自身も家で新聞を取らなくなりました。活字のイメージは印刷した紙の本だが、スマホを見ているも実はそこで電子書籍を読んでいるかもしれない。ということも起こっているような気がする。皆さんは本をどんな方法で読んでいるか聞いてみたい。

社会人 WA さん:学校に勤めているが、補修の監督をさせてもらったとき課題を事前にやっておくと
なったとき、英語でみんながスマホで単語を調べている。自分の時代はまだ紙の辞書だった。

紙で調べる必要性がなくなったかどうかということだが、自分の時代も電子辞書はあってでもその
頃は紙の辞書を推奨されていた。それは隣の項目が目に入るという効果があったからで、本来の目
的とは違う学びを生み出すからだったと思う。そのことも含めて活字離れだと思う。

インターネットでいろいろ読んだりするが、検索履歴から導かれるテーマは絞られたりすることがあ
る。ネットニュースなどもユーザーをそのようなニュースにだけ誘導するように作られているように思
う。

高校生 HO さん:新聞離れという意見があったが、スマホでニュースを見ていると自分の欲しい記
事だけしか出てこない。自分の欲しいものが簡単に手に入ると、それで満足して探す時間の短縮な
ったと考える。別の知識(雑音)が入ってこないほうがいいよね。というのが社会の考え方になってい
ると思う。そういう背景があるから和田さんがおっしゃったように皆がスマホをつかって活字離れが
起こってくるのではないかと思う。

館長:自分がもともと持っていた考え方に近いものだけが集まってきてしまう。

高校生 HO さん:社会がそのほうが効率的で時間の短縮になるという認識になっているのでそのよ
うな行動になると思う。授業中に単語を調べるのをスマホでするという行為も、調べるほうは熟語を
しらべたいのに、辞書は単語で引き記述を追っていかなければ用例としての熟語は出てこない。
Google 翻訳を使うほうが圧倒的に早い。電子辞書も今はあまり使っていないかもしれない。それら
が活字離れにつながっているのでは。

高校生 MA さん:学校の授業で何分か時間を区切られて調べてまとめるという課題が出たときは、
ネットのほうが早いのでそちらを使う。

館長:本だったら取りに行かなきゃいけないかったりするのかな。学校の授業自体がそういう構造にな
っているということなのかな。

社会人 YO さん:一人一台端末が配られてから、探究の授業をするにもほかの授業をするのにも棟
をまたいで3階から5階まで来てもらうというようなことが生じてくる。来ても本がなかったりするとタ
イムパフォーマンス(時間当たりの得られるもの)を重視する時代になっているのでスマホで調べれ
ばすぐ答えが出るものに図書館を使う人は少なくなっている。目的のものがはっきりしていてその答
えに早くたどり着きたいという状況に関しては図書館は圧倒的に不利。まだ自分が知らないもの、
世の中にこんな考え方があるのか、こういうことに興味のある人が世の中にはいるのかという、知ら

なかったものと出会うことが図書館の強みだと思っていて、活字離れというよりか、スマホにはいつていると思うので自分の意識の外からくるものへの関心がひくくなっているのが現代なのかな。と高校生の情報行動をみていると感じる。

高校生 OKさん:活字離れというところからは離れてしまうが、うちの高校の図書館は4階にある。棟からいけば3棟の4階にある。自分は2棟にいるし中学生は中学棟にいる。そうなると図書館に行く機会というのがかなり限られてしまう。

自分は昼休みなどに積極的に行くようにしているが、まわりの人をみていると、スマホに注力していて自分の興味があることにしか触っていない。図書館に行こうという人はあまりいない。

図書館にいくと、興味のないものも目について読んでみようかなということもあるが、漫画のアプリだとあなたへのおすすめだとか全国的に人気があるものしか上がってこず、そのほかのものや自分の本当に興味のあるものは見えてこない。朝読書が中学まではあったが高校ではなくなってしまった。

高校生 KOさん:4階遠いですね。高1の時はもっと遠くて1階までおりてから4階にいかなければならなかった。

館長:物理的な距離の影響も大きいかもしれない。学校図書館って上階にあることが多いのかな?

学生 NAさん:私の高校は2階だった。

高校生 KOさん:私は小中高とすべて4階でした。

社会人 SHさん:私の勤める高等学校は3階 以前の高校も3階 その前は元ピロティを囲った1階だった。

館長:場所を変えられないよね。図書館の物理的な場所が遠いと、授業の中で効率よく情報を手に入れようと思ったとき、そもそも環境として使える状況にならなくなってきているのはどのように解消できるのか。

また皆が言っているスマホの場合はと図書館の場合はとっているのはどこが違うんだろう。図書館の中の資料が全部スマホの中に入ってしまうと、それで解決するのだろうか。

いろんな情報に触れるという意味では解決しないよね。

高校生 HOさん:司書の先生にお世話になっている。先生の経験の中から必要と思われる資料を選んでくれる。それが図書館に頼る理由。

館長:図書館には三つの要素が必要という話があって、一つは情報、二つ目は場所、三つめは人、人が介在する情報ということに意味があるのではないかと。この“人”というのは司書の先生ということだけではなく、友達同士、そして今日たまたま行き合わせたような人との出会いという意味でも大事なのではないかということが言われている。皆の話を聞いているとそういう流れが見えてきました。

元館長 HI さん:高校生に質問です。チャットに書き込みます。さっきのプライベートな居場所とパブリックな居場所つながりなんだけど、学校でも、違うクラスとか学年とかの人と出会う場所ってあるのかな?まちでも同じ。

長野県の高校は、これから「共学・共創」を掲げようとしてるんだけど、違う学年、違う学校、あるいは地域の人と一緒に創る(課題を探る)、学部ということなんだと思うのね。

そんなことって必要だと思う?そういうことってワクワクすることなのかな?

いままでは知ったり学んだりすることはあくまで自分のためだったと言ってもいいからね。

そのラボはそんなことを試す場所。共知・共創を掲げてきました。みんなで知ること、本だけじゃなくて、デジタル情報も、人も情報。出会う、創ることが知ることにとってとても大事になってきたと考えてのことです。

活字ってなんだろう?読むって印刷物や文字を読むことだけかしら?地図とか年表とか写真とか絵とか、デジタルメディアに出てくる文字を読むのは読むじゃないのかしら?

もちろん、本を読むこととか所有することとか本棚に並べられることとかは僕らの世代にはとても大事なんですけどね。みんなにとってはどうなのかしら?ちなみに、私は日経電子版をスマホで読んでます

ここにこれからの学校の「図書館」の絵あるよー

<https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/koko/dezain/documents/01.pdf> (長野県スクールデザイン 2020)

館長:元館長さんのチャットの質問について、学校以外の人たちとのつながり必要だと思う?という問いかけがあるんだけどそれについてなにかありますか

高校生 IS さん:僕が図書館に行く理由は、新しいものに触れるため。新書コーナーをみたりして「こんな本があるんだ。」とみるのは楽しい。新しいことに触れ新しいことを知ることは大事なことで楽しいことだと思う。おなじ学校の中だったらまだ話す場面があるが、違う学校、もしくは地域の人たちとは接点がないと今の社会は出会いようがないので、そういう意味では公共の場が、どこかしらでふらっと立ち寄ったらそこで接点ができ議論ができるようなそんな場所が欲しいなと思います。

館長:ふらっというのがいいよね。それだからワクワク感が生まれるのかな。それでいて安心して安全な場所であるということが必要だね。学校という場はそういう意味で安心して安全な場所なのかな。

知らない人はいないものね。

でもこのような公共の場はいろいろな知らない人がいるよね。そういう場での居場所ってどんなイメージになるのかな

高校生 IK さん: 今日ここに来るまでこんな風になっていることを知らなかった。学校の中だと同じ友達と同じような話をして集まることが多いが、こうやってまったく違う意見なんかが聞ける、取り入れられる場所があることが大事だな。こんな機会を増やしていけたらと思った。

館長: 読む本とか、得る情報が似通ってきてしまうということと通じるところがある話ですね。いつも一緒にいる仲間たちとは違う人と出会えたことでぜんぜん違う話が聞けて、人と話をするっていいよね。

実は高校生の IK さんとは当初活字離れについて単独でインタビューをうける予定だった。でもこの場で思いもかけない話ができてよかった。

元館長の HI さんの質問は普段会わない人と交流できる場をもっているかということを知っているが、そういうことはある？

高校生 KO さん: 文化祭の時など学年を超えて交流するというようなイベントがあったが、正直それほどうまくいくものでもないように感じた。やろうというのは簡単だけど、いざやろうとすると人間いろいろあるから難しいと感じる。班活動のように交流時間が長かったり、一つのことに向けてみんなでやろうということになると機運が高まるが、なんとなくだとうまくいかないと思う。学年を越えようが目的だとうまくいかない。越えた先に目標があればこそうまくいく。

高校生 MA さん: つながりみたいなことでいうと、ツイッターなどでバズるとか言ってコメントがたくさんつくことがあるが、知らない人だけと言っていることに反応するということがつながりがある。

館長: それは興味関心があるから、同じことを感じていると共感したよとか、違うんじゃない?ということなどを、同じテーマだからこそ言えるということがあるのかな。

高校生 MA さん: 同じテーマだからこそつながっていけるということがあるのではないかと考えている。

館長: その時匿名であることは大事なの？

高校生 MA さん: 自分の本名、顔が出ていないからこそ心を出せるみたいなことはある。

館長: リアルだと出せないことも、

高校生 MA さん:知らないからこそ言いやすい。

館長:私はツイッターと Facebook をしているが、使い分けはしている。Facebook は実名がでるからね。

高校生 OK さん: SNS、匿名にもつながると思うが、学校生活とかリアルのこのような場は自分を偽らないと生活できない。本性を出すことも大切だのなんなのと言われるが、そんなに簡単に本性は出せない。人の目を気にしたりするので。SNS だと本心をさらけ出せるので匿名でもそんな場に本当のつながりがあるのではないかと思う。

司書 HO:顔が見えない同士だからこそ本心がさらけ出せるというご意見だと思う。一方リアルでもバーチャルでも議論ができる場が欲しいという意見もさっきあった。気持ちを伝えたいんだ、わかってほしいんだという気持ちが居場所を求める気持ちにあるのかなと思った。議論ができる場が欲しいといった I くんはどう思いますか？

高校生 IS さん:僕としてはあんまり相手の背景とか考えて話しても本当のこといづらいから、かといって画面越しも話づらい。人と話すときは対面で話したいが、その人の年齢とか出身地とか知ると話づらくなる部分もあるので、相手の背景は気にせずに言いたいことを言い、相手の意見をきいて新しいことを学ぶというのが楽しいと思う。

館長:リアルの時とオンラインの時はなにか違いがあるの？

高校生 IS さん:班活で ECC というディベート班に所属しているが、県外の高校と対戦するときはオンラインで対戦する。お互い伝えたいという気持ちはあるが、あくまで画面越しというスピーカーを通しての声だから熱意が伝わりにくい。練習とかで対面でやっているときのほうが盛り上がりを感じる。

館長:リアルだからこそなすけたり、とかそういうこともあるね。

社会人 TE さん:リアルのほうがだと集中せざる得ない。オンラインだとながらができる。今もネットワークの保守作業をしながら参加している。テーマとか内容によって、リアルのほうが深いところに行けることもあるし、内容がしっかりしていればオンラインの人も手を止めて集中するであろうし、話のもっていきかたかな。リアルの空気感も大事にしたいなと思う。リアルでないとわからないこともあるんですよ。オンラインが万能ではない。

社会人 SH さん:二択じゃないのかなと思っていて、どっちがいいのというのは目的による。熱く語りた

いときはオンラインはまだ慣れなかったり、でもどうしても参加したい思いがあるときオンラインがあることで時間がやりくりできる。どうしても二択になりがちだが、先端であっても便利であっても、どんな場合にそれが便利なのかを考えるベースをはぐくむのが人間の読書だと思っていて、一回自分の中に考えを落とし込んでからやりたいことに向けてこの方法がいいんじゃないかという流れを作り出せる人になるために読書とかそういうものが必要なと思う。ネットのほうが自分も楽になってしまっているし、本の中に居場所を求めている時のほうが物事に真摯だったような気がする。一人になれていて、一人で自分の求めているものを探ることができていた。SNS はつながれるけれど一人で物事を考えることができない。人の意見に必ずさらされるので、自分一人で考える・感じる時間も大切だと思う。

司書 HO:一人で立ち止まって考えるための居場所という意味での居場所も提示してもらった。

社会人 YO さん:学生の N さんのおっしゃっていた斎藤孝さんの本の中に、読書は一人でいて、一人で深く考えながらするのだが、そこには本を書いた著者も存在していて、一人でいながら著者と対話しているような体験が読書であるという一説があります。人間が成長するためには自分一人の時間というのもとても大事だと思うのだけれど、それだけだとひとりよがりになってしまう。その両方が満たせるのが一冊の本と最初から最後まで付き合い通す経験が成長という実りをもたらしてくれるのではないかと考えて、高校生の皆さんに本をすすめている。

SNS を使ってらっしゃる高校生の皆さんは、例えば漫画のアプリで最新話を読み終わったとたん世界中の人と感想を言い合う状況に慣れていると思う。でもこの状況は昔からそうだったわけではなく、公開されて自分で読んで他の人の感想が読めるのは一か月後投書欄でみたいな時間の流れだったと思う。そこで自分の考えが深まっていく時間があつたのに、今は見終わった瞬間に感想を言い合う盛り上がる気持ちもよくわかるが(自分もやったことがあるので、ドラマの実況とかそういうものだと思うが)自分一人でそれを咀嚼する時間をもてるのが読書のいいところかなと思う。両方を意図的に使い分けられる読書人になってほしいなあというのが、今のところの図書館としての課題である。

司書 HO:読書をしているときは一人ではない。ということと、読書をしているときは考えている速度を自分でコントロールできるようなキーワードかなあと思うが、

館長:読書というものには対話が発生している、そのことについてどのようなイメージを持つかなということですね。

学生 NA さん:カント哲学をかみくだいた本に、哲学は本の中で哲学者と対話をしているんだと書いてありました。哲学は本来自分が生きていく中で、どのように生きていけばよいかということ誰かから学ぶのではなく、誰かの言葉をヒントにしつつ自分で生き方を模索する思考のことと思う。それ

だから対話が大切になると思う。

館長:「孤立はつらいけれど孤独は悪いことではない。」というフレーズを読んだことがある。一人で考える時間とか、何か本を読んだとき、同じ本を読んだ誰かと少し時間をおいて対話する楽しみについてもあると思う。リアルタイムに SNS などでスピード感をもってつながれる楽しさと、少し不便だけれど時間をかけて一人の時間の後に対話してみることとどんな違いがあるのかな？

高校生 HO さん: SNS で交わされるリアルタイムの感想は作者が思い描いている表層の部分しか交わすことができないような気がする。アニメの作品はその日その日のリアルタイムでトレンドに感想が載ったりするが、作者が作った部分の一面しか見れていないように思う。自分はアニメを見た後に一人でシーンを反芻して意味を考えている。好きな作品は5, 6回見ているが、名作と呼ばれるような作品は見ている人を引き付けることができる。それだけ深い意味を持ち何回見ても飽きさせない(意味を考えさせる)ということがあると思う。自分で内容の奥に進んでいく楽しさがある。本でもアニメでも作者の考えていることに近づいていきたいということがある。

司書 HO: WEB だからこそ本性をさらけ出せる人に会えるという意見もあるが

高校生 HO さん: 深く自分の考えをさらけ出し、言える人に出会いたいと思って高校を選んだ。オンラインとかリアルとか関係なく深く話せるもの同士を集める場が必要なのだと思う。

館長: 今日のこの場というのはどうだったのかな。自分でこんな場を作ってみるということも視野に入れてもいいように思う。

高校生 HO さん: そのような考えに言われて初めて目が向いた。

館長: 高校にそのような場を作り出せる素地はあるのか、班活とかどうだろう。友達同士だったらいつだって話せるが、こんなことを話したいという思いをもったときできる場があるか。

社会人 YO さん: 哲学対話を試みようとかしてみたことはあるが、とにかく高校生は忙しい。せっかく有志が企画してもなかなか人が集まらないが、チャレンジしてみる価値はありとおもう。

社会人 SH さん: 学校図書館では働いている側の働きかけも大事になってくるのかと思うが、こういうテーマで開催するというだけではなくても、誰かがつぶやいたらそれが話題となるものすごくゆるい日常的な場としてありたいと思う。どうしても大人がこうしてはいけない、とか、飲み物が持ち込めなかったり、静かにしてねだったり、みんなに気持ちをさらけ出して熱い議論をしてね。という前に大人はしないでねとか守ってねとか出しているんだなと思う。大人もいい場所にしなければと思

っているだけであって、今日のように皆さんとしゃべることで大人としてそんなに気張らなくていいのではないかと、思えるように、皆さんの発信力を一人の大人としてすごいな、と思って変わっていきると感じた。皆さんも図書館にもう少しリラックスしてそんなことを投げかけてほしいと思う。大人も学生も同じ土俵で図書館を使っているという集まりがその場限りの集まりができればいいなと思います。

館長：最初に皆さんに言ってもらったのはそれぞれの場合で考えている場が違うのかな。ということだったけれど、聞いているとそれぞれ別々に存在しているわけではなく、グラデーションがあるのかなと思った。このカフェのきっかけは試験期間になるとただ勉強するためだけに来ている学生さんがいて、図書館はそれだけの場所ではないのになど不毛感を感じていたことによる。この場をきっかけにみんながこんな場所があったらいいなとイメージを持ったことがあったら最後に聞かせてほしい。

高校生 IK さん：仲のいい人たちの中ではかえって自分の意見を言いづらいことがあるので、こんな機会があったらまた参加したいと思った。

高校生 KO さん：一つのことについていろんな人と話すことがないので楽しかった。自分は新聞班という班活動をしているのでそこで今日話したことを活用してみたい。

高校生 MA さん：このような参加は初めてだったが、知らない人だからというのがよかった。

高校生 OK さん：最初の活字の話からいろいろな方向に広がっていくのがすごくよかった。自分も新聞班だが、今日のことをまた話してみたい。

学生 NA さん：活字離れが話題に上がっていたが、最近ビブリオバトルというゲームで、自分の好きな本について熱く語るという場が近年できていると思う。

メディアでもこのようなことをもっと取り上げてくれれば、皆が活字離れや本についてもっと考えるようになると思う。うまくしゃべれない中でみなさんが真剣に聞いてくれたありがとうございます。

高校生 HO さん：自分の意見をいうということを普段は時間もないし、相手も同じ空気感で話せる場も大切なんだなと思った。

高校生 IS さん：高校では3年生とか真剣に勉強していてやはり静かにしていなければならない雰囲気だが、図書館でいろんな人がいる場所だから、こんな風にいつでも誰かと話せる場所が欲しいなと感じた。

社会人 TE さん：オンラインでの参加だったが、今回はリアルで参加したかったなと思った。自分の

住んでいる地域とかこういう雰囲気のある場所を欲しいなと思った。欲しかった作れよ。と言われそうだが、伊那町ベースというところに技術書だとか教育 ICT 関連の本を置かせてもらっている。そういうところからきっかけづくりをしていきたい。

社会人 SH さん:とても刺激的だった。おもしろかった。ありがとうございます。

社会人 YO さん:4月から新しい環境で、5階で、図書館をどのように作っていったらいいか模索していたので今日の話はとても参考になった。ありがとうございました。

社会人 WA さん:普段とはまた違う高校生の話を聞いてとてもよかった。

元館長 HI さん:ぼくは、デジタルになった論文や本以外のフローなインタラクションみたいなものは「情報に当たりをつける」ために使うなあ。デジタルな情報にもリアル(出版された)な情報でも同じこと。なんだけど、当たりをつけることがデジタルになってすごく楽になった。本しかない時は万巻の書を読んで、その索引や脚注から繋いでいくしかなかったからね

図書館もそうね。みんなが本を探せるようになったことってすごく大きな変化 図書館だけじゃなくて学校そのものがそうなったらいいねえええ w

居場所は自分がつくらんとね w 少なくとも県立長野のみんなは今日みたいにみんなと話しながらつくろうと思ってるからみんな引き続き話しにくるべし!

司書 HO:今日は長時間にわたりぎっちり話したり聞いたりしていただきありがとうございます。

最後にハイブリットで行った会場の通信が上手くいかず、ピンチヒッターとして助けに来て会の最中通信状態やみんなの話を見守ってくれていた、機械に詳しいご常連の社会人 KO さんからも、「自分が高校生の時とちがってみんな考えていてすごいなと思った。お疲れさまでした。」と感想をいただきました。

話すことと同じくらい聞くこともその場を作る大事な要素であることが感じられたラボカフェでした。リアルの高校生が、そしてかつて高校生だった人たちが、どんな思いを持って自分の場を作っていたか、そしてそれに図書館はどんなふうに関わっているかが垣間見える皆さんの対話となりました。改めて時間を作って参加して下さった皆さんありがとうございました。